

2023年12月

『氷室』 2023年12月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一八〇）

神鷄二羽放し飼ひなり七五三  
草莽の志士の国なり草紅葉  
特別祈願要予約なり酉の市  
かつこめは一番札やお酉さま  
二軒目の屋号「芋かん」酉の市  
中岡慎太郎の墓へ冬紅葉  
墨継ぎの書の氣息見ゆ冬館  
彌太郎の生誕地なり焼諸屋

万次郎遭難の海鯨の来  
故郷の記憶につられ年の市  
綿虫の離れぬ窓の日暮かな  
鯛焼の餡の好みに囂し  
据ゑ置きの旅の計画十二月  
懸案はひとまづ置いて葛湯吹く  
登り窯ある中庭の実千両  
水潤るや池の底なる道の址  
山頂の雪のみ朝日浴びてをり  
形良き鯛の鯛なり年惜しむ

2023年11月

『氷室』 2023年11月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七九）

稜線の樹冠きはだち黄落期  
諸事ありて秋晴にこの懐かしさ  
橡の実の雨に転がる石畳  
芋虫が歩道横断半ばなり  
薬草になると拾うて柿の蒂  
バス待ちつつ読書の子ども秋日和  
ビルの間より運動会の声来る  
果てしなし山家の夜なる茸鍋

本因坊発祥の地へ银杏の実

六条の小路どんつき小紫  
金柑に玩具の蛇ぞ鳥だまし  
日曜の径独占め穴まどひ  
古書店に百円の札文化の日  
エレベーター背後に開く夜寒かな  
土佐弁に小春日和の室津港  
ジョギングのこゑ同期してそぞろ寒  
菅公の産湯の井戸や石路の花  
冬の水ゆつたり揖斐川長良川

2023年10月

『氷室』 2023年10月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七八）

秋桜この地一帯西寺跡  
楯円の影なす卓上の酸橘かな  
大輪の菊自慢なり十日ほど  
秋霖が石段洗ふ文殊堂  
台風来ときに攻撃的自然  
天気図を痕跡として野分去る  
雨の間の光かろやか貴船菊  
宙に向く線香花火か彼岸花

紅葉前線見据ゑて秋の旅支度  
単線となりたる谿の法師蟬  
列車止まれば蜻蛉とまる待避線  
自然薯の蔓の巻き付く男橋  
蝸に誘ひこまれし森深し  
どこからも浅間の見ゆる里紅葉  
大噴火より二十年蔦紅葉  
清流に棲む虻うるるとは愉快  
放牧の馬と野菊の摩天崖  
薩摩富士海に浮かびて秋涼し

2023年9月

『氷室』 2023年9月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七七）

肉料る残暑きびしきをりなれば  
台風の雲間の月に呼びかけて  
台風や備へは四か国語なり  
小型とは言へ強かに野分風  
水澄むや弘法大師ここかしこ  
畦に立つ雲見つめつつ秋の田に  
貫禄のあの木何の樹秋の里  
富士見より富士の見えざる野分雲

じつくりと断層見学秋の昼  
里山を取り巻いてをり彼岸花  
桑の木の残る月夜野は秋へ  
霧晴れて裾野の長き赤城山  
薬草園「有毒」の札秋乾き  
鶏頭を手桶一杯持ち帰る  
上衣とり声張り上げて今は秋  
新米にうすく削りて鰹節  
塩加減絶妙患者の栗ご飯  
寒暖差さらに大きく秋深し

2023年8月

『氷室』 2023年8月号 18句 p.2,p.3

夏草の刈られし丈に伸びてをり  
幸福駅ソフトクリーム分け合うて  
馬たちの大器晩成雲の峰  
雷鳴や富良野見おろす丘に立ち  
駅舎より傘の先出る驟雨かな  
ひと休みに百合の木よろし木下闇  
北大のまづ春楡の夏落葉  
植物園よく育ちたる独活の花

梶の葉に落書ありて植物園  
薬草掘る有毒の札横に置き  
アラビカの焙煎室へ西日かな  
羽田発帯広便は海霧のなか  
小麦熟る右も左も小麦畑

蚕豆の茹で上がる香の青みかな  
清流を堰止め里の水遊  
紗の帯や昼の銚町小走りに  
扇に載せ恋の歌なり乞巧奠  
松扇を七色に巻き乞巧奠

2023年7月

『氷室』 2023年7月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七五） 尾池和夫

犬と犬すこしく離れ初夏の風  
すだ椎の花は樹冠に隠れがち  
どくだみの八重は十葉とは言へず  
出勤に数へ紫陽花十五株  
カレーの香に古書店街の樟若葉  
学問に倦むの文字なしアマリリス  
凌霄花揺るる中央分離帯  
田水沸く真中に鳥の三羽二羽

摘果メロン漬物となり白ご飯  
出張さなか集中豪雨よ梅雨に入る  
やりすごす赤信号や梅雨滂沱  
梅雨の夜や果つることなき与太話  
晴男力不足よ梅雨激し  
睡蓮の水のひろごり鶴ヶ池  
大崩海岸崩れ梅雨明くる  
二泊夜の馴染みとなるは火取虫  
富士見橋富士あるはずの夏の雲  
道なりに進路を北へ夏の富士

2023年6月

『氷室』 2023年6月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七四） 尾池和夫

土ふはりとアスパラガスのによつきによき  
川原までコーヒー出前みどりの日  
ウイスキー熟成中よ竹の秋

夏近し麦芽粉碎室の音  
麦芽室出でたときの初夏の風  
天窓より初夏のいろ樽香る  
近道は崖崩れなり夏の山  
ヨーグルトの発酵速し夏来る

石山の大学艇庫五月来て  
雨乞ひするごとカラーの白天に  
仏法僧のひと声にけふ始まりぬ  
国境無きジュラ紀ありけり雨蛙  
新樹いま平和の鐘へ石の道  
葉桜やかたて井伊家の江戸屋敷  
新緑の揺れきらきらと日和雨  
丸の内線地下に入る薄暑かな  
手の届くほどにたわたわ夏蜜柑  
遠山は襲のごとし夏霞

2023年5月

『氷室』 2023年5月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七三） 尾池和夫

産寧坂下るに春の闇深し  
先付のこれはこれとは木の芽和  
三番手さつと揚げたる浜防風  
四皿目の箸休めなり石蓐なり  
直焼の春の筍こぶしほど  
花の雨しきり川床組むこと急ぎ  
大空の波立つごとく桜散る  
新弟子のざんばら髪よ風光る

故郷は城山のもと土佐水木  
春暑し海拔二メートル標示  
防潮堤高く高くと春颯  
春風の北与力町むかしより  
チャイム鳴る学舎無人の春休  
椅子正面富士山頂の春の雪  
見目よきは明日へ残して苺採る  
葉桜や消防自動車出動す

強風受け流し新緑の樹冠  
将棋さす男五組の樟若葉

2023年4月

『氷室』 2023年4月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七二） 尾池和夫

六地藏尊に六本枝垂梅  
糸遊や樹齡千年松のすゑ  
納豆発祥の地や京北の春時雨  
春の日や疏水の砂の波状紋  
看板屋の看板消して春の雪  
掛軸の雛や書院の違い棚  
小手毬を「人」に据ゑたる未生流  
庭狭しと馬酔木の花のふさふさと

熱々にして青のりの葛仕立  
春落葉こそと逃げ込む雀みて  
春の日や土佐文旦の種の数  
久方の山科盆地朝霞  
比良山は高しと尾根の春の雪  
春の雪どさと米原操車場  
米原の停車五分に春の雪  
新任の思ひの強し万愚節  
富士桜越しに富士見ゆ吾の机  
さまさまの思案流るる花筏

2023年3月

『氷室』 2023年3月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七一） 尾池和夫

古民家移築せし大部屋の御殿雛  
御殿雛収まる梁の黒光り  
先付に琵琶湖の魚と桃の花  
菜の花の白味噌仕立香り立つ  
紅鱒の焼きもの木の芽味噌の味  
落の臺長けては厨飾りとす

大き口集まり来るや春の池  
白鳥帰る約一週間遅れにて

とりあへず進路を北へ梅探る  
実習圃場耕してをる博士かな  
雀の子三羽もつれて線路上  
暮れかぬる愛鷹山も富士山も  
蛇のごと畦に渡しぬ蝌蚪の紐  
紅梅や白亜の家の庭先に  
地溝帯と野梅見上ぐる急斜面  
おばさんの店先に売り桃の花  
釜無川流れ込みたり春の鳶  
笛吹川ここより北へ残る雪

2023年2月

『氷室』 2023年2月号 18句 p.2,p.3  
瓢鮎抄（一七〇） 尾池和夫

もう一度向きを直して睨み鯛  
漁夫の炊く寄鍋食うべ氷見の宿  
白菜をほぐすことより鱈の鍋  
寄鍋や湯気の向かふの幸四郎  
半殺しの団子に載せて味噌を焼く  
笹がきの牛蒡たつぷり猪の鍋  
葉喰せし翌朝の無人駅  
北国の便り懐炉とともに着く

駅伝二着まで五分ほど雪の中  
火を焚いて大根守る氷点下  
睨みみて睨み疲れて奴唄  
福笹を高く掲げて道ゆづる  
熊手持つ人は恵比須の顔をして  
闇のなか枯葉の音の追うてくる  
冬の滝滝のかたちに凍りけり  
六甲淡路断層系や冬景色  
柳の芽円山応挙の幽霊図  
物語せよ聖バレンタインの日

2023年1月

『氷室』 2023年1月号 18句 p.2,p.3

瓢鮎抄（一六九） 尾池和夫

もう一度めくりて捨つる古暦  
砂紋引き終はりしあとに落葉かな  
随筆の筆進まずに寅彦忌  
太陽のなき元日と越冬隊  
めでたしと少し長びく初電話  
静かなる元朝迎ふ会津かな  
野口英世の手術遺跡や雪の町  
元旦の第一椀の小露餅

ゆっくりとゆるりと丹頂鶴の舞  
登山靴のままに来てをり初詣  
一豊の雑煮切餅土佐なれば  
いつもより丁寧に噛む雑煮かな  
かりがねの崩れて湖に下りにけり  
撒饌のずしりと重し初詣  
この頃は親にも子にもお年玉  
新客の尺八ひびく二日かな  
一升を開けし二日の客二人  
荒川に白波の立つ二日かな